



明治のこゝろの荘原

～ハーンの見学・荘原の町～

荘原地区は、簸川平野の東の端に位置し、南部の丘陵地帯には数々の古墳が点在しており、その中に国宝指定の358本の銅剣が出土した荒神谷遺跡もあります。また、尼子十旗の第六旗として活躍した米原氏の居城・高瀬城にまつわる歴史も残っています。こうした歴史の他に、宍道湖を挟んで松江と直接に接するという立地から、物流の中継所としての歴史も重ねてきました。現代でも、その地理的条件を生かし、出雲空港や高速自動車のインターチェンジ等、交通の要所としての発展を続けています。

明治期の荘原の様子は、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の出雲大社詣の記録が有名です。小泉八雲一行は、明治29年8月11日（火）午前7時30分に松江を出発し、9時には荘原へ到着。今市で昼食をとって、その日は大社の因幡屋本館に宿泊します。17日（月）まで海水浴や千家氏との交流等で滞在し、8月18日（火）の午前7時半に大社を出発、午前11時に荘原に到着しました。しかし、暴風雨のため汽船が運休、この日は荘原で宿泊して、翌日午前3時に乗船して5時に松江へ帰着しています。

このように、出雲から松江・境港・京阪神への旅は、鉄道開通まではもっぱら宍道湖の汽船を利用することが通常でありました。今市にあった島根県女子師範学校の修学旅行日記によれば、その変遷がよく分かります。

松江と荘原とは、宍道経由でおよそ1時間半の船旅であったようです。ハーンの支払った船賃は13銭。その船足はあまり速くなかったようで、荘原で乗れなかった汽船に、人力車に乗って追えば、宍道の船着き場で乗船できたとも言われています。汽船の発着は、現在の南灘・中灘あたりで、旧国道の県道平田荘原線へ通じる汽船町や旧国道沿いは、汽船を利用する人や物の往来でさぞや賑やかだったことでしょう。通りはたくさんの商店が建ち並び、賑わいを見せていました。そのなごりは昭和の時代になっても伺うことができました。当時、ハーンはどんな荘原の風景を目にしていたのでしょうか。

年月日	主な旅程
明治39年 11月6日	午前4時 校庭集合 午前7時前 荘原到着（松江浦丸・快盛丸に乗船） 午前9時 宍道を経由し松江棧橋到着 境港へ
明治41年 5月8日	午前6時 校庭集合 午前8時 荘原到着 松江・勝部旅館にて昼食 午後1時半 松江から敷島丸乗船 午後2時10分 松江出発 午後6時 境港を出発・阪鶴丸にて舞鶴へ
明治42年 5月	松江まではこれまで通り、徒歩と汽船による。 松江から鉄道にて安来・米子へ（12時到着） 午後1時 鉄道にて米子発 午後2時 境港着 阪鶴丸にて出港
明治43年 4月26日	荘原まで徒歩、汽船にて宍道へ到着。 午前10時10分 宍道発（鉄道） 午後 0時49分 境港着（鉄道） 午後 3時 阪鶴丸にて出港
明治44年 5月 1日	今市から境港まで鉄道利用へ 境港から阪鶴丸にて出港
明治45年 4月22日	全旅程を鉄道により大阪へ（余部鉄橋通過）

- ◆ 『斐川町誌 調査報告第4集』の「明治の旅路」岡義重氏論文を参考にしました
- ◆ 『ラフカディオ・ハーン著作集 第15巻』の「ラフカディオ・ハーン年譜」を参考にしました